氏　名　（本　籍）	柳田　直美（ 鹿児島県 ）
学　位　の　種　類	博　士（　言語学　）
学　位　記　番　号	博　乙　第 2662 号
学 位 授 与 年 月 日	平成２５年　９月３０日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第４条第２項該当
審　査　研　究　科	人文社会科学研究科
学 位 論 文 題 目	接触場面における母語話者のコミュニケーション方略研究 －情報やりとり方略の学習に着目して－

主　　査	筑波大学教授	博士（言語学）	砂川　有里子
副　　査	筑波大学教授	博士（言語学）	杉本　武
副　　査	筑波大学准教授	博士（人文科学）	一二三　朋子
副　　査	筑波大学准教授	博士（言語学）	小野　正樹

論　文　の　要　旨

本論文は、外国人とのコミュニケーションという側面から、異なる背景を持つ人々が行う言語的調節のありかたと、その学習の仕組みを解明しようとする研究である。母語話者が非母語話者とコミュニケーションを行う状況は「接触場面」と呼ばれている。接触場面で多くの言語的調節が行われることは従来の研究でも論じられているが、本論文の特色は、母語話者側の言語的調節を、「情報やり」と「情報とり」それぞれの側面から詳細に記述し、接触経験の多い母語話者と少ない母語話者の言語的調節のありかたを比較することにより、接触経験を通じた学習の仕組みについて考察する点である。

本論文の構成は以下の通りである。

序　章　本研究の目的
第１章　先行研究と本研究の位置づけ
第２章　研究方法
第３章　分析の枠組み
第４章　母語話者の情報やり方略に接触経験が及ぼす影響
第５章　母語話者の情報とり方略に接触経験が及ぼす影響
第６章　母語話者の情報やりとり方略の学習モデルの構築
第７章　母語話者に対する日本語での情報やりとり支援に向けた提案
終　章　本研究のまとめと今後の展望

本論文は、日本語教育の経験のない母語話者に着目し、彼らと初対面の非母語話者との対話資料を分析することを目的とする。資料収集に用いた方法は、短編コメディの前・後半部分のどちらかを母語話者と非母語話者それぞれに視聴させ、両者の対話による情報のやりとりの後

に物語の全体を再現させるというものである。調査協力者は、非母語話者との接触経験の多い母語話者10名、接触経験の少ない母語話者10名、中～上級の日本語学習者5名で、全部で20編の会話データを収録し、収録後に意識面の差を見るためのフォローアップアンケートを実施している。本調査の課題は、接触場面における日本語教育の経験を持たない一般の母語話者の言語行動面と意識面における以下の2点である。

課題１：情報提供の際の言語的調節に接触経験が影響するか。影響するとすれば、それはどのように表れるか。

課題２：情報受け取りの際の言語的調節に接触経験が影響するか。影響するとすれば、それはどのように表れるか。

課題１について、接触経験の多い母語話者は、(1)情報の切れ目が明確な文単位の発話を多く用いる、(2)理解チェックを用いて、非母語話者に対して躊躇なく理解確認を行う、(3)非母語話者からの不理解表明がなくても自発的に発話修正を行う、という3つの情報やり方略を使用することが明らかにされている。一方、意識調査では、接触経験の多い母語話者はこのような言語的調節の使用の変化を明確に意識していたわけではないという結果が得られている。

課題２については、接触経験の多い母語話者は、(4)意識的にあいづちを多用する、(5)理解表明と理解あいづちを併用する、(6)正確な情報を得るために繰り返し情報内容の確認を行う、(7)非母語話者の発話困難を察知して積極的かつ自信のある共同発話を行うという4つの情報とり方略を用いることが明らかにされている。一方、意識調査では、(4)(5)(7)に関して言語的調節の変化を認識していたが、(6)については明確な意識の変化がないという結果が得られている。

以上の分析をもとに、「やりとりされる情報の理解と確認に関する方略」と、「非母語話者の抱える問題の察知と援助に関する方略」の２点において、母語話者の情報やりとり方略の学習モデルの記述を試みている。まず、「やりとりされる情報の理解に関する方略」では、与えた情報を受け手である非母語話者が理解しているかどうかの確認、また、受け取った情報を母語話者自身が理解したかどうかの表明と、受け取った情報の理解が正しいかどうかの確認作業が頻繁に行われるようになっていることが指摘される。これは、接触場面では情報の「理解」に関わる部分を明示することが、情報やりとりにおいて重要であることを母語話者が学習してきた結果であるとされる。次に、「非母語話者の抱える問題の察知と援助に関する方略」では、接触経験を経て、非母語話者の抱える問題の察知と援助が行われるようになることが指摘される。具体的には、情報が正確に伝わるように簡潔な情報提供に移行したり、非母語話者の不理解を予測して自身の発話を言い換えたり、非母語話者の発話の遂行が困難な状態を察知した上で、積極的に援助をするようになることである。これらのことは、一般の母語話者が、接触場面において、言語的に優位な立場である母語話者として、非母語話者との言語的ギャップを埋めるようなふるまいの必要性を学習してきたことの現れであると述べられる。

以上の分析によって記述した母語話者の情報やりとり方略の学習モデルをもとに、接触場面での母語話者のコミュニケーション力養成に関する提言を行っている。すなわち、接触経験の少ない母語話者に対しては、非母語話者の言語の理解レベルや産出レベルを予測・判断する必要のない方略を提示し、接触経験が多い母語話者に対しては、非母語話者の言語の理解レベルや産出レベルを母語話者が予測・判断して使用するような方略を提示する必要のあることが主

張されている。

審　査　の　要　旨

日本語母語話者と非母語話者の接触場面の研究は、非母語話者側の日本語習得研究に主眼が置かれ、母語話者側の実態の解明が遅れている。さらに、母語話者側の研究は、日本語教師の発話を対象とするものがほとんどで、日本語教育の経験がない一般の日本語母語話者の言語的な調節を解明しようとするものは極めて限られている。そのような中で、一般の日本語母語話者の接触場面での発話を、外国人との接触経験の多寡という観点から追求した本論文は、独創性という点で高く評価できる。具体的には、非母語話者との間での正確な情報伝達という目的が達成されるまでの過程で、①どのような問題が発生するか、②問題が発生した場合、どのような方略を用いて解決するか、③問題の発生が予測される場合、どのような方略を用いて回避するかなどの点を明らかにし、接触場面の経験を豊富に持つ者とそうでない者との間に見られる方略の質的・量的な異なりを記述し、日本語母語話者が接触場面の経験を積むことによって得られる学習の過程をモデル化するという、これまでにない新しい研究である。この試みは、これまで十分に解明されていなかった母語話者の接触経験による学習過程を明らかにするという点で母語習得とも第二言語習得とも異なる新たな言語習得の領域があることを示した点で革新的であり、今後、この方面での研究の方向性を示したことが高く評価できる。また、昨今の日本国内における外国人居住者の増加は、外国人の日本語習得の必要性を高めるだけでなく、日本人の外国人とのコミュニケーション力向上の必要性も高めている。この課題に対処するには、日本語母語話者による接触場面での言語的な調節のあり方と学習の過程を記述し、学習のメカニズム解明を行う研究が行われなければならない。本論文はその先駆けとして、接触場面での言語的な調節の基礎研究や接触場面でのコミュニケーション指導についての提言を行うだけでなく、今後の研究の方向性や具体的な方法を提示したという点で、社会的にも大きな意義を持つものである。

一方において、本論文には、接触場面の未経験者より経験者の方が情報のやりとりが上手だという前提に縛られた考察が散見するという問題も指摘できる。例えば、経験者の方に情報提供・意味交渉が多いという結果をもってして、経験者は非母語話者との理解を促進するためのさまざまな方略を駆使しているという論述を行っているが、多くの方略を用いることがより円滑なコミュニケーションに結びついているのかどうかについては、さらなるデータの解析を踏まえた慎重な検討が必要である。また、統計的な有意差が出ていない場合、そのことがどのような意味を持つのかについての考察が見過ごされているなどの問題もある。

このようにいくつかの問題は指摘できるものの、それらが本論文の価値を損ねるものではない。本論文は学術的にも社会的にも意義を持つ優れた研究として、今後のさらなる進展が期待されるものである。

平成２５年６月２４日、人文社会科学研究科学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと、本論文について著者に説明を求めた後、関連事項について質疑応答を行った。引き続き、所定の学力確認を行い、審議の結果、審査委員全員一致で合格と判定された。

よって著者は、博士（言語学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。